

2018/12/30 先週のメッセージより

「聖書の読み方」

聖書は神のことばであり、その言葉はすべて真実です。ところが、中には正反対に思えるような表現があり、理解に迷うことがあります。そういう時、どのように判断すれば良いのでしょうか。

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」（ヨハネ 5:39）

聖書は、イエス・キリストについて証しする書ですから、第一にすべきは、イエス様が何とおっしゃっているかということです。憲法という基本があつて、国の法律が作られるように、イエス様の言葉があつて、それを説明するために弟子が書いたものが新約聖書です。ですから、聖書の言葉だからといって、どれも同じように扱おうとわからなくなってしまいます。聖書を理解する基本は、イエス様の言葉にあります。

■救いに関するイエス様のことば

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:24-25）

「死からいのちに移る」とは、「救われる」ということです。悪魔の仕業によって人に死が入った時から、人は生まれながらに神との結びつきを失った状態です。そのままでは滅びる状態のわたしが、神のいのちを取り戻すには、神のことばを聞いて信じる必要があります。イエス様は言われました。

聖書が教える「信じる」とは、神の呼びかけを聞いてそれに応答することです。それは、神が差し伸べている御手をつかむ選択とも言えます。では、どのようにして神の呼びかけを聞くことができるのでしょうか。

「わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます。」（ヨハネ 12:32）

神は「すべての人をご自分に引き寄せる」、つまり、すべての人に呼びかけると言っておられます。神は霊ですから、その神からの語りかけに応答することができるのは、肉の体ではなく、私たちの霊である魂です。魂への神の語りかけは私たちの潜在意識に残り、無意識に

死への恐怖や罪責感などを感じ、人は不安を覚えます。この時、潜在意識の中で神に助けを求め、人は救われるのです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。」
(ヨハネ 6:47)

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」(ヨハネ 6:54)

「永遠のいのちを持ちます。」(同 6:47) と「永遠のいのちを持っています。」(同 5:54) は、まったく同じ言葉が使われていて、文法上、未来に起こることではなく現在起こっていることを表しています。

つまり、イエス様を信じるができるのは、本人も気づかぬうちに魂が神に応答して救われていたからなのです。救われていた魂が御言葉に出会い、イエス様を信じることができ、救いを自覚することができるということです。

救いとは、信じた後に与えられるものではなく、魂が神の呼びかけに応答した時に与えられていたものなのです。神はすべての人に呼びかけておられますから、救いのチャンスはすべての人に平等です。生まれてから一度も福音を聞いたことのない人も、幼児も、障害や病気によって告白することのできない人も、すべての人が神の呼びかけを聞いています。神が造られたいのちはすべて完全な魂を持っており、神の呼びかけに応えることができます。

救われた人が自覚に至るまで時間がかかることもあり、イエスは神であると信じられることで救われたかどうかを確認できますが、救われたのは魂が神の呼びかけに応答した時です。この憲法を無視すると、イエスが主であると告白しなければ救われないという律法に縛られて、重度の障害者は救われないのか、福音を聞くチャンスがなかった人は救われないのかななどの疑問が生まれます。しかし、そうではなく、魂が神の呼びかけに応答した者が救われるのです。

神はすべての人を引き上げたいと願い、すべての人に呼びかけておられます。神の呼びかけがなければ応答することもできませんから、救いは神の御業です。私たちが伝道するのは、神の呼びかけに応えた魂の刈り取りです。それによって、救いを確認することができ、この地上で神と共に生きる平安を得ることができるものです。ですから、たとえ救いを確認できなかったとしても、自分が伝道しなかったから救われなかったなどと、誤った考えで自分を責めることはありません。

■終わりの日について

「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」(ヨハネ 6:44)

一般的に「終わりの日」とは、イエス様が再臨して、最後の審判があり、この世の歴史が終わる時であると理解されていますが、果たしてそうなのでしょうか。イエス様の言葉から考えてみましょう。

「われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

(ルカ 23:41-43)

イエス様は十字架で息を引き取る直前、共に処刑されようとしている犯罪者が、イエス様を信じる告白をした時、「あなたは今日、私と共にパラダイスにいる」と言われました。パラダイスとは、当時使われていた 70 人訳聖書で、「エデンの園」すなわち「神の国」を指す言葉です。つまり、イエス様はこの人に、「あなたは今日よみがえって私と一緒に天国にいる。」と言ったのです。ということは、「終わりの日に人をよみがえらせる」というイエス様の言葉と照らし合わせると、終わりの日とは、肉体が滅び、この地上での人生が終わる日ということになります。

黙示録に、終わりの日の前に様々な天災や患難があるとありますが、それはいつの時代にも起こることです。ですから、神様は黙示録を通して、どんなに信仰を試されるようなことがあるとも、あなたは必ず天国に行くから信仰を揺るがしてはならないと、私たちに励ましてくださっているのです。

このように、イエス様が何とっておられるのかを拾い上げることで、聖書全体を正しく理解することができます。

イエス様の言葉から、私たちはこの地上で死んだらすぐに天国に行くことができるということがわかります。終わりの日について心配したり、難しく考えたりする必要はありません。

■良い行いができないと救いは取り消されるのか

多くのクリスチャンが、救われてからも良い行いができず、罪を犯してしまう自分を見て、これで救われたと言えるのだろうか、救いが取り消されるのではないだろうかと心配します。しかし、イエス様ははっきりと次のように言っておられます。

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」(ヨハネ 10:28)

一度永遠のいのちを手にした者は、何があろうとも滅びることなく、救いが奪い去られるようなことはない。これが、イエス・キリストの言葉です。たとえどのような状態になろうとも、神が永遠のいのちを与えた人は、絶対に天国に行くのです。

その理由を理解するには、罪の定義を知る必要があります。

一般に罪とは人に有害な行為だと考えられていますが、哲学でも心理学でも、人がそのような行為をするのは不安が原因であると言われていています。不安だから愛されようとし、そのために憎しみや怒りや妬みが生じ、争いや悪い行いに発展するのです。もし、相手をそのまま受け入れることができれば、不安は解消します。

神学では、さらに人の不安の原因が明らかにされています。それは、悪魔の惑わしによって人が神との結びつきを失い、神の愛が見えなくなったことによるものです。神との結びつきを失った状態が死であり、私たちは皆死の恐怖の奴隷であると聖書は語っています。その結果、人は罪を犯すようになったのです。

そのような私たちを、神はもとの状態に戻そうとしてください。つまり、罪は人間のもともとの性質ではなく、病気と同じで、神はこの病気を癒すことがおできになります。愛されていることがわからなくなって生じた病気ですから、愛されているとわかることによって癒されるのです。それが十字架です。

癒すことができる病気を理由に、神が救いを取り消すなどあり得ません。人は自分の病気を見て、本当に救われたのだろうか不安になったりもしますが、神はむしろあなたが病気だから救ってくださったのです。

「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。」

(ヨハネ 12:47)

イエス・キリストは、罪を癒すために来たのですから、私たちが御言葉を実行できなくても救いを取り消すことはありません。これがイエス様の語った言葉であり、憲法になります。このことをしっかりと頭に入れておけば、良い行いを実行できないことで救いが取り消されるのではないかという不安は解消されます。

ところが、この憲法がわかっていないために、イエス様は、「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」(マタイ 7:19) とも言っておられるから、やはり行いが悪ければ救いが取り消されるのだと考えている人達もいます。実際にカトリック教会では、良い行いができないクリスチャンは火で焼かれてしまうと解釈し、洗礼によってそれ以前の罪は赦されても、洗礼を受けた後の罪は今後の行いによると教えていますが、ルターはそれに対して異を唱えました。

聖書を読む時には、1 節だけ取り出すのではなく、前後の文脈から意味を考えることが重要です。

この時イエス様は、「狭い門からはいりなさい。」(同 7:13)、「にせ預言者たちに気をつけなさい。」(同 7:15) というメッセージに続けて、上の言葉を語っておられます。そして、偽預言者達について、「実によって彼らを見分けることができる」「良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結ぶ」(同 7:16-17) と言っておられるのです。つまり、イエス様は「私を信じなさい」というメッセージの中で、救われて永遠のいのちを持っている者を「良い木」

にたとえ、救われている者はやがてイエスを信じることができるようになるということを「良い実を結ぶ」と言っておられるのです。

魂が神の呼びかけに応答しても、イエス様を信じる信仰に至るには、時間がかかります。しかし、最終的にはイエス様を信じられるようになっていくから心配はいらないと、イエス様は語っておられるのです。反対に、神の呼びかけに応答していない人は、信仰とは無縁の行動を取り続けるのです。

■神にとっての行いとは

「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」(マタイ 7:21)

御心を行なうことができなければ、救われていても天国に入ることはできないのでしょうか。ここでポイントになるのは、イエス様が教える「御心を行なう」とは、「良い行い」を指しているのかということです。イエス様のことばから考えてみましょう。

「すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行なうために、何をすべきでしょうか。」イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」(ヨハネ 6:28-29)

「神のわざを行なう」とは「御心を行なう」ことです。それは神が遣わした者を信じることだとイエス様は言われました。つまり、御心を行なうとはイエス様を信じることであり、決して良い行いを指しているわけではありません。

「神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで、しかも墮落してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たちだからです。」
(へブル 6:5-6)

この言葉も多くの人が誤解して、信じた後の生活態度が悪ければ救いが取り消されるのではないかと恐れています。それでは先ほどのイエス様のことばと矛盾が生じます。あくまでも、イエス様のことばが憲法であり、「救いは取り消されることはない」というイエス様のことばが優先されます。つまり、この箇所は、「もう一度悔い改めに立ち返らせることなどできないのだから、墮落することなどあり得ない」という意味なのです。なぜなら、誰も神と私たちを切り離すことなどできず、神が私たちを離すことなどないからです。

この箇所は「事実と反する仮定」を表現したもので、「どうやったってイエス様の十字架を元に戻すなんてできないのだから、一度救われた人はもう後戻りできず、前に進むしかない。

過去を振り返らず安息を求めて進みましょう。」という励ましの意味で書かれているのです。

聖書の読み方は、あくまでもイエス様のことばが中心です。一見難解な御言葉であっても、救いの意味がはっきり分かっていると、御言葉の本当の意味が分かるようになり、旧約聖書もよく理解できるようになります。

イエス様は、私たちに対して無条件で愛すると繰り返し語っておられます。そして、十字架は、その言葉以上のメッセージを私たちに伝えます。イエス様は、十字架に架かる前、友のために命を捨てる以上の愛はないと言って、十字架に架られました。そして、実際に私たちのために命を差し出し、私はあなたを愛してやまないという最大のメッセージを伝えられたのです。これをしっかり頭に入れて読むと、聖書が正しく理解できるようになります。